

四散心

無添加ゆずこしょう

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

岩沢ゆずきが透明人間になる話

目次

2	1
0	↓
↓	2
3	0
0	—
—	—
58	1

1 ↓ 20

プロローグ

「あーもう少しであがりだったんだけどなあ」

頰杖をついた男が溜息のあと愚痴をこぼした。

「まあ今日も部長仕事終わってなくて残業コースだったからどのみちいい暇つぶしになつてよかつたんじゃないの」

「もうあそこ行くの何回目なのホント。どうせ今回もコスプレさんの迷惑行為とかそんなんじゃないの」

「でも今回ちよつと違うみたいだよ。何人か怪我してるらしいし」

「もうちよつ…と人に迷惑かけずに生きられないもんかねえ」

法の番人である二人の男は通報にあつた現場にパトカーで向かっていた。

その夜、駅前には騒がしい空気に包まれた。

何かが起こった。

その言葉を受けてネタに餓えたメディアや騒ぎを聞きつけた野次馬達、消防や救急、

警察などが続々と集結する。

現場となった駅はこの町の交通機関の中枢、その近鉄線プラットホームと桜通口付近のトイレの間でそれは起こっていた。

最初に駆け付けた警官は二人、その現場を見て顔を傾げた。

テロが起こった、怪しい二人組が走っていたなど通報が続出していたので少々緊迫して向かってきたつもりだったがそこには不審者の姿はなかった。

トイレからは煙が外に溢れていた。

室内は光源が割れており、煙と合わさって中の様子は全く分からない。

警官は口にハンカチを当てライトを照らしながらゆっくりと中へ入っていった。

室内からは人は見つからなかった。

ーいたずらか、全く迷惑なもんだな：

煙の充満したトイレから出ようとしたとき、警官の足に何か当たった。

まるでソフトボールのように軽く小さい何かは煙に隠れるようにどこかに転がって行ってしまった。

何を蹴ったかは煙を抜いてから確認すればいいか、と換気扇のボタンを探し始めた。

警官の蹴ったそれは煙の発生源であることなどまだ知る由もなかった。

プラットホームには数個の和紙でできた球が、改札には持ち手の先に輪の付いた短刀

が、のちに見つかるとなる。

◇

夜中にかかわらず騒がしくなる駅前。

そこから200m程度離れたところに中学校があった。

職員はとつくに退勤し、しんとした校舎。

校庭にある遊具から全身黒い服装をした男が飛び出し、駅から遠ざかるように走り去った。

この日、最後の不審者通報だった。

1.

早朝。まだ日も上がらぬ時間。

寝坊常習犯なのに、珍しいこともあるもんだな。

どうやら新聞配達の投函の音で目が覚めたらしい。

今や情報メディアは数多あり、毎日溢れんばかりの情報が行きかっているというのに。

いまだに一方的かつ狭い視野の新聞なんてとつてる世帯があるのか、と思った。

早くに目が覚めたのはいいが、朝が弱いのは相変わらずなので瞼が上がらない。

まだ目覚ましは鳴っていないが、二度寝して大変な目に合う予兆だろう。

かと言って、今から起きたところで特にすることもない。

出来れば、ギリギリまでこうして布団の中でいたい。

バイクの音は遠ざかって行った。

こんな寒い中ご苦労だな、と掛布団を引っ張り顔の半分を覆い隠すようにして呟いた。

冬の布団は人をダメにする。

優しく人を包んで離さないんだ。

その強力な魔力に負けないため、あえて徹夜をするなんて日もあった。

目覚まし時計の音はかき消し、無意識へと誘ってしまふ。

今まで何度お前のせいで散々な目にあってきたことか。

もちろん布団のせいではなく自己責任だってこともわかってる。

動物と人間は括弧的に全く別の進化を辿ってきたが未だに欲に対して自制出来ない部分が多い。

人類の大きな課題だなと勝手に立案する。

少し思考を巡らせたところで少し悟った。

これは二度寝に入る前のくだらない思考ではないか、と。

(そういえば昨日寝る前歯を磨くの忘れてたな…。最近虫歯かもしれない歯が出てきたし、傷んできたら嫌だし朝だけ磨いとくか)

体質なのかよく虫歯になってしまう。

そのたびに歯医者に出向き、銀歯が並ぶのが嫌だった。

かと言ってこうしてたびたび歯磨きを忘れてしまう自分をなんとかしたいとも思っていた。

何とかしたいと思いつつ今日まで何もせず生きてきた。

今日も朝からバイトがある。

生きながらえるためのアルバイト。

やりがいもなく、次の職場で仕事を覚えるのが面倒で辞めずに続けているバイト。

人間関係もさほど変わることもなく気楽にやっていた。

でも出来たらもうハローワークには行きたくないかな…。

「痛っ…」

口の右奥の上唇にできた口内炎に思わず顔をしかめる。

(もう出てきやがった)

新しくできた口内炎だった。

(とりあえず口の中の掃除が先だな…)

ふん、と鼻から勢いよく空気を出しつつ体を起こした。

そして、重い瞼をゆっくりと開いた。

2.

一体何が起こった？

それはいつもと変わらぬ風景だった。

ただの自分の部屋だ。

だが、少し違うところがある。

自分の姿が、完全に消えていた。

それは白人がかつて黒人に行っていた無視行為的なそれではない。

可視ができない状態になっていた。

しかし、足元を見ると、布団が自分の足の形に添って丸くへこんでいる。

恐らくは自分が透過してしまっているだけで重みや質量は変化していないのだろう。

夢でも見ているのだろうか？

わからない。

頬に両手を当ててみると感触はあるようで、幽霊的な現象ではなく俗にいう透明人間的な状態に自分になっていることを自覚した。

なぜそうなったのか？

同じような日々繰り返して昨日あったことが思い出せない。

特に何もなかったような気がするが。

いつも通り遅めに起きて。

交代時間3分前に出勤して。

バイトから帰ってきて。

深夜までゲームやって、寝た。

別に変わったことなんてないはず。

本能がままに体の彼方此方を触ってみる。

(寝巻のジャージまで透明になってるし…)

なんだ、完全透明は全裸限定じゃないのか。

少し安心した。

とりあえず洗面所に向かおう、と部屋から出た。

まだ暗い朝。

シャッターの降りた暗い部屋。

普段は明るくなってからの起床なので不慣れな足つきで散らかった部屋のものを踏んだりしないようにゆっくり進んでいく。

就寝時に使うオレンジ色の小さな電灯は寿命を迎えてから変えていなかった。

「おお…見事に全身消えてんなあ…」

洗面所の鏡に自分が移ることはなかった。

もちろん影も。

スイッチを押すとかなりのタイム差で照明する、白熱電灯が早朝の洗面台を薄暗く照らしているだけだった。

こんなことも起こるもんなんだな、と、改めて感心する。

しかし、今日の出勤はどうしようか。

普通に職場に向かって皆を驚かせても面白いけど…。

なんだかこの奇妙で信じがたい現象にずいぶん冷静に対処できているのではないか。いつまでこの状態は続くのだろうか？

いきなり現れるような形で現象が終わってしまうのか。

だとして、次にまた同じ現象に巡り会うことがあるだろうか。

まだ試してみたいこともいろいろあるし、とりあえず。

「歯を磨こう…唾液すら染みる」



「体調が悪い？」

「あーはい。頭痛がひどくてちよつと今日出勤するのきつそうです」

「そう。もう座つてもいられないほどそれはひどいのね？」

「はい」

「どうしても来られないのね？」

「はい」

しづとい。店長しづといぞ。

従業員同士ではある程度信頼関係や友好関係があるが、どうにも従業員と経営側の仲はいまいち上手くいっていない。

それは経営側が全くと言っていいほど従業員を信頼していないから。

高圧的に、一方的に強い口調で今まで気にしなかつたようなことまで声を荒げて注意したりすること。

なのに従業員側の意見をあまり承認してくれないこともあり、表面上は打ち解けあっているように見えても、水と油のようにもはや混ざることすら難しい状況にあった。

従業員も個々に好き勝手やつてるのも事実だが。

互いに仕事はこなしているので消費側、経営のさらに上層部の連中も特に何も言わない。

正直、電話もしたくない。

でも連絡は最低しとかなないと後から何を言われることか。

「しようがないわねえ…」

ようやく店長が折れてくれた。

「前に早朝で三時間しかシフト入ってない矢立君に5時間延長してもらって、そのあとに入ってた富野君に3時間早く入ってもらうから。感謝するのよ？」

「はい」

店長入ればいいじゃないすか、と心底思っていた。

店長ら経営陣は基本的に従業員のフォローに入ることはほぼない。

誠に勝手な自営業である。

「それじゃあお大事に」

「」

返事を発する間もなく電話回線は切断された。

相手が受話器を置いたのだ。

「…」

耳からスマートフォンを離し通話終了の画面を確認する。

3分か。

長い3分間だった。

カップヌードルを待つてる時間なんて比じゃない。

いや、カップヌードルの3分はタイマーとかつけて他のことができる。

ひたすら文句を聞いているよりかよっほど有意義に過ごせるな、と思う。

無造作にスマートフォンを今朝寝ていた布団に放り投げる。

最近頻繁に連絡を取る相手もない。

電話を掛ける前少し気になってこの今自分が起こっている状態について調べた。

体が全く見えず、その体を透かして向こう側の景色を見ることができると。そこにおいて

もわからないが、感触では確認できる。

という定義らしい。

非常に類似した状況ではあるが、はたして信じてよいものなのか。

今まで沢山の“それ”を題材にした物語や映画を見たことがある。

それらの制作人に同じ体験をした人間はいるのだろうか。

もしいれば接触して、何かヒントの一つでももらえられないものか。

何かするにしても、この現象の終了時間がわからない今迂闊に夢に見た行動をするわ

けにはいかない。

ひとまず情報を集めてみるか。

勉強机のノートパソコンに向かう。

デスク用のモニターをデュアルモニター代わりにノートパソコンに繋いでいる、変な見た目のpcに。

◇

透明人間になったら何がしたい？

夢のある質問だ。

普段できないことがしてみたい。

たとえば…。

ぱつと強盗や殺人など、よくある物語の行動ばかり思いついた。

もしくは覗きとか、男特有の性的な妄想。

割とまともなことができることがない。

かと言つて、この奇妙な現象をただ家で過ごして終わるのもなんだかもつたない気分だ。

擬態や迷彩ではない。

完全な透過状態にある。

いや、そもそもこの現象は俺一人にだけ起こっているのだろうか？

同業者が何人かいたりしてね。

そこから同業者同士による秘密厳守が目的の殺し合いが起こったりして。

もしそうだとしたらおつかないな。

でもそんなことが起こっても互いに目視はできないわけだから、足音を立てないように逃げればいいのか。

さすがに裸で外を出歩くななんて記事を見て一瞬想像してしまっただが俺はそこまで異常な人間じゃない。

そもそも衣類も一緒に消えている。

一体どうなっているのだろうか。

自分自身が完全透過してるほうが不思議なところだが。

「脱いで…みるか」

寝巻だし、確認だし。

と自分を言い訳しつつ上着のファスナーに手をかけた。

不思議なことに目には見えないのにファスナーの金属の硬さははっきりわかった。

先端の合成ゴムの部分を摘み、ゆっくりと下に添って動かしていく。

下まで行くとかかる力がなくなり、胸囲の軽く締め付けられる感覚がなくなった。

「あれ…」

袖から手を抜き、小さくたたんで左腕に持ってみたが可視できる状態にはならなかった。

ならば…と布団の上に上着を軽く投げた。

「やっぱりね」

黒い、緑色のラインの入ったジャージの上が姿を現した。

判定は自分に触れているもの、というわけか。

ならば、と試すように勉強机に触れる。

その瞬間。

机は跡形もなく消えた。

「うわっ…机の裏埃だらけじゃんきったね」

もうちよつと試すもの考えてやればよかったな。

手を離すと、代わり映えのない年季の入った勉強机が再び現れた。

散らかったプリントや広告。

パソコン、昔学校で使っていた教科書類。

1mmも動いちやいない。

「モノは思い通り消えたりできるわけか…」

薄暗い朝日に照らされる部屋にTシャツとジャージの下が突然現れた。

マネキンのように膨らみのある衣類であるが中には人の形をした空洞があるだけだった。

「どうやら。」

「俺自身は消えたままっぽいな…」

「触れているものの透過は自由に操ることができるとの自分自身の透過はコントロールできないようだ。」

「まあそれならそれでもいい。多少不便だが好都合なことの方が多いただろうからね…」

「さて、何をしようか。」

◇

「痛っ」

「どうした？何もないとこでつまずきそうになったか？」

「いや…なんか肩に当たったみたいなきな感覚があったんだけど…」

狭い通路を横に並んで歩いてきた二人組の男の会話。

(もつと隅歩けよ…)

意を決して外に出た。

自分が空気なせいで行きかう通行人は空気に何のためらいもなく突っ込んできた。

(これ普通に移動するより相当疲れるな…)

目的のない外出が始まった。

遠出しようかと思つたが車を出すにも、運転者が見えなければ何かあるかもしれない。
い。

自転車も、道が狭いところに入ったりすると歩行者や車がためらいもなく突っ込んでくるかもしれない。

最前は歩行だろう。もつとも小回りがきくし、衝突した相手の被害も考えての決断だった。

だがその決断によつて長距離出かけることはできなくなった。

普段、様々なことに追われて生きてきた。

山を越えるたびに暇つぶしに、休日が無駄にしないように。

ふらつと向かうところ。

今回も特に目的がなかったためか、やはり無意識にその場所へ向かっていた。
駅前。

通勤のピーク時間が過ぎ、人も少ない。

(…)

なんでこんなところに来たんだろうか。

かつて学生時代利用していた駅前は今ではどこか遠い存在のように感じていた。
近くて遠い存在。

結局改札まで行ったところで、引き返した。

通りを出て、流されるように右に行く。

ふと、空を見上げた。

高層ビルに囲まれ、多角に切り取られた空。

どこか窮屈に感じられた。

足元に敷き詰められた灰色の石のタイル。

青に輝くガラス張りのビル群。

田舎者が見たら息苦しさすら感じるだろう。

周りに俺を気に掛ける人はいない。

いや、この町の人々はいつも何かに追われていて、他人をかまってる暇なんてない。

だからこそ、ああも生き急いでいるのだ。

ああも疲れた顔をしているのだ。

様子見にふらりと寄ったつもりだったがただどこか悲しい気分になっただけだった。

自分勝手に立ち寄って自分勝手に毛嫌いし、逃げるように離れていった。

まるで好奇心で近寄って行って、危険に気づき怯えて逃げる子供のよう。

通学時に利用していた時とは違う。

いや、気づかなかつただけか。

そこに卒業式後の学校の名残惜しい気持ちはなかつた。

ただ、無感情で利用客を受け入れるロボットのようには思えた。

駅前に現れた透明人間は誰の気にも留まらぬまま去つた。



「おはようございますー」

「あ、富野君今日早いですね」

「ほら今日岩沢君いないじゃないですか、だから3時間早く出勤なんですよね」

「災難ですよね」

「いやいや：矢立さんなんて5時間追加ですよ…」

「店長やマネージャーフロア入ってくれませんかからねえ…」

「まあ岩沢君が抜けなきやいい話なんだけど、彼に助けてもらつたこともあるから何も言えないなあ」

「岩沢君も若干恩着せがましいところあるからなあ」

「そうなの？」

「この前シフト代わつてもらつたんだけど、そのかわりにもし自分が困つたことがあつたら助けてくださいねって」

「まあ…今日こうして休んでいて、助け合つてるわけだから…」

「お互い様ですね」

店の奥、事務所から矢立が出てきた。

ユニフォームは着ていない。

私服だ。

「これで上がります。お疲れ様です」

二人の従業員は矢立に振り返り、お疲れ様ですと挨拶した。

矢立が出て行つた後、売り場のほうに二人が視線を戻す。

「噂をすれば、だな」

「俺らが岩沢フオロー入るのは全然かまわないんだけど、店長うるさいからなあ」
「それな」

「フオローのこと内緒にするとそれこそめんどくさいからなあ」
「うん」

「何でもいいけど岩沢君何かあったのかね？」

「さあ…店長は体調不良だつて言つてましたよ」

「俺さ…あんまりアイツの言うこと信じらんないんだよね…」

「ズル休みつてことですか？」

「いやまあ…何つうか…あれだ。真面目系クズタイプじゃない」

「結構言いますねえ」

「仕事もちゃんとやつてるし、敬語だし、あんまりミスしないし。だからこそタチ悪いつていうかさ」

「まあわからなくもないですね…」

二人以外店には誰もいない。

だからこうして二人は気兼ねなく雑談している。

もちろん仕事はこなしている。

監視カメラ越しに店長が見てるからだ。

「真面目系だからさ…若干利用させてもらってることもあんだよね」

「えっ」

「いやたとえば発注数ミスったらアイツのせいにしたり、会計ミスってもアイツのせいにしたりさ」

「マジすかそれやばくないすか」

「いやいやいや俺がミスるよりアイツがミスったことにするとさ、店長もそんなに怒らないじゃん？」

痛み分けよ痛み分け」

「もしかして嫌われてるんすか彼？」

「そうなんじゃない？みんなやってるってたぶん」

瞬間、事務所の扉が大きな音を立てて開いた。

「なんだ？」

「店長が勢いよく出てったのかもな」

◇

「何だよ…クソ…」

「こんなことを聞くために、こんなことをしたわけじゃない。」

こんなつもりじゃなかった。

まさか自分の悪口を聞く羽目になるとは。

こんなつもりどころじゃない。

むしろ聞きたくなかった。

あれ？

もしかして自分はあるの職場で…。

(俺はもしかして嫌われてるのか…?)

いや。違う。

(利用されてた…それなりに仲良いと思ってた奴に…)

人なんてそんなもん。

わかっていた。

自分も嫌いな奴でもこれ以上関係を動かさないように笑顔で対応している人がいる。

それは本音と建前の国、日本では嫌でも求められる能力だ。

面と向かって言われない分、シヨックは大きかった。

今までいじめなるものにあつたことがない。

それなりに誠実に、適当に生きてきた。

だからこそ余計色々なことを考えてしまう。

(何なんだろうな……この気持ちは)

頭を抱える。

見えない両手で見えない頭を。

従業員用の駐車場の片隅で誰にも気づかれず。

俺はいしころか。

その辺のこいしやほこりなんだ。

何もしない無害なゴミだ。

(結局、何もできなきやつまらない能力なんだな)

犯罪を実行する勇氣はない。

別に自分の手を汚してまで何かしたいとも思わない。

(もつと別の能力……時間の操作とかそういうのだつたらもう少し面白くなりそうなんだけど)

ふらふらと立ち上がった。

職場を離れる。

興味本位で立ち寄ったがおおよそこの行動はマイナスだっただろう。

激しい後悔。

頭は真っ白だ。

駅前から東に1kmほどのところに職場はある。

わざわざ危険を冒してまで聞き耳を立てに来たのに、結果は散々だった。

時刻は3時を過ぎていた。

無駄にしてるなあ…休日。

◇

「痛っ」

「どうした？」

痛みを叫んだ男はその場に倒れた。

「おいおい…お前どうしたんだよ今日なんかおかしいぞ」

「自分でもわかんねえ…でもさっきのとは違って肩じゃなくてつま先にひっかけた感じがした」

男が手を取り合って立ち上がる。

「でもさ、ここ段差ねえよ？」

「何なんだろうな…。まさかのドジキヤラ転身すか俺」

「知るかよ」

男達は苦笑しながら再び歩き出した。

「なんじゃありゃ」

老父がぼつり、目を丸めて言った。

「どうなすつたおうさん。また不良に家落書きされたんか」

「いや…なんか、マネキンが動いているのが見えた…気がする」

「はあ？」

「それが目え凝らした瞬間消えはつたんや」

「薬でもやつたんか？そんなことあるわけないやろ」

「せやなあ…」

付近のホームレスの男二人の会話だった。

「ひっ…」

「ん？どしたん」

「空耳かなあ『聞こえますか』って向こうから…」

少女はおどけながら声の聞こえた方向に指さした。

指さした先には大きな道路の横断歩道。

上空には高速道路を走る車が走行音をまき散らしていた。

「空耳じゃない？この辺騒音酷いじゃない」

「でも確かに聞こえたんだってえ…」

話を聞いている側の少女は首を傾げた。

「なんかこう…じめつとした低い男の声…」

「なんか怖いよ大丈夫？」

「うん…もう帰ろうなんか怖い…」

いち早く学校から下校していた近所の中学生だった。

二人は逃げるように横断歩道付近から去って行った。

もちろん少女がきいたのは空耳ではない。

(怖がらせちゃったかなあ)

もう少し好奇心で明るい反応を期待してたのに。

でも、対象が悪かったか。

こりや不審者として通報されてもおかしくないな。

俺はあれから、ばれるかハラハラしながら付近の通行人にちよつかいをかけていた。

もしかしたら自分に気づく奴が出てくるかもしれない。

そんな期待を寄せて。

◇

そもそもなぜこの現象は起こっている？

神なるものが出て、ただ観察し反応を楽しんでいるのだろうか？

それともどこかの組織がこの現象を引き起こすきっかけになる何かを開発し、無作為に選ばれた実験台がたまたま俺だったとか。

なんととはた迷惑な。

監視するものがあるなら相当退屈しているだろう。

俺は犯罪を犯す勇気がないからだ。

透明になったからと言って常識外れた行動をとらないから。

今の状態でも十分常識外れだが。

いいだろう。

今までの体験からしてもう少し踏み切ったことをしてもいいんじゃないかと思い始めているところだ。

いきなり空気にされ気分だ。

部屋の隅の埃だ。

俺はこの状況の居心地の悪さに耐えられなくなっているのかもしれない。

ミュージシャンが無音のスタジオが嫌いなように、自分もこの誰にも相手してもらえない状況が嫌なのだ。

誰かに気付けてほしい。

誰かにかまってほしい。

たとえ透明でも。

やってやる。

道端の小石に気付くまで。

捕まってもいい。

もしかしたら学者が集まって俺を実験台にされてしまうかもしれない。

今はそれでもいいとすら思っていた。

不気味な光景だった。

夕日が沈む刻。

駅前から東にある、上空を高速道路が走る交差点。

4、50mはあるだろう長い横断歩道。

時間的に家に帰る学生や社会人がいてもおかしくないのに、ひっそりとしていた。

車は相変わらず多い。

だが、通行人は一人もいなかった。

隣接するコンビニエンスストアからも人影は伺えない。

周りを見る。

これでは相手にしてくれそうな人すら見つからない。

しようがないから駅前まで戻るか。

そう思いまっすぐ横断歩道の前で止まった。

交通する車が多くてさすがに信号無視はできない。

信号が変わるのをおとなしく待つ。

(…?)

視界の横を通る車の間に紛れて、横断歩道の向こうに人影が見えた。

街灯の逆光で服装や顔ははっきり見えない。

少し待っていると信号が変わった。

向こう側の人の、姿が露わになる。

(あれは…忍者?)

2.

「私は、お前の“懼”…」

相手からは50mは離れている。

ありえないはずだが語り掛けるような声量ではっきりと聞こえた。

夕日は沈み月が町を照らす。そのもと、忍者が佇んでいた。

全身紺色。額には金の装飾。頭中で顔は見えない。腰にはいくつもの道具が背負われている。

コスプレとしてはよくできているレベルだ。

目の前の忍者は横断歩道の向こう、正面に立ち微動だにしない。

なぜここにいる？

そういつた類のイベントが近くであったのか？

そもそも俺の姿は今可視できない状態にある。

つまりは今の言葉はこちらに向けられた言葉ではないのかもしれない。

あるいは空耳か。

試すように小さく返事をする。

「…お前とは誰のことだ？」

返事はすぐ帰ってこなかった。

忍者は顔を上げた。

元々俯いた角度であったので微かな変化ではあったがはつきりわかった。

忍者がこちらを向いている。

こちらの姿は見えないはずじゃなかったのか？という疑問を頭によぎらせた瞬間。

「…岩沢ゆずき」

聞こえてきたのは自分の名前だった。

嘘だろう？なぜ俺が認識できる？

まさか現象は終わっていたのか？

とつきに自分の両手を見た。

少なくとも俺の目には見えていない。

なぜ？日中俺は完全に空気だったはずだ。小石だったはずだ。

効果が切れたのか？

やはり俺を監視する者がいて、実験が終わったから処分しに来たのか？

思考が拍車をかけ始めた瞬間、視界内に忍者が飛び込んできた。

(…!!)

反射的に裏に飛び出したユズキは尻餅をつき、肩まで地面に接触した。

忍者は目の前で止まり肩から飛び出している突起の一つに手をかけた。

よく見ると頭巾の隙間から見えるはずの目元は闇に隠され見えない。

目の部分から赤い光が発行しているだけだった。

突起を引き抜く。

刀だ。全身がはつきり見える今突起は少なくとも6つ以上ある。

その中の一本を右手で引き抜いているのだ。

ユズキは骨盤に受けたダメージに震えながら上半身を起こした。

「なぜ…」

ユズキの問いに答えず忍者は右腕を大きく空に向かって振り上げられる。

短刀を握りしめられていた右こぶしは一瞬解かれ短刀が180度向きを変えた。

刃先が下に持ち替えられたのだ。その刃の先にはユズキがいた。

瞬間忍者は右手を振り落した。

◇

一閃。

キンツと短く金属が擦れる音がユズキの耳元に響いた。

謎の忍者が振り下ろした短刀は地面に敷き詰められたレンガブロックの間に刺さった。

ユズキがとつさに頭を逸らしたのだ。

「くっ…」

それは本能、反射的に動き出したものだった。回避が成功するとは思っていなかった。

我に返ったユズキはすばやく上半身を回転し立ち上がった。

正面を向くと忍者が走ってきた横断歩道が視界に入った。もう赤になっている。だがまだ車は止まったままだ。青に変わる前のすべての信号が赤になっている状態にあった。

「行けるか…?」

選択の余地はなかった。

すぐ裏にはいきなり切りかかってきた謎の忍者がいる。

赤の横断歩道を真つ直ぐに走り出した。

ユズキは陸上選手ではない。素人のスタートダッシュは残念ながら横断歩道を信号が切り替わる一瞬で50mを走ることとは火を見るより明らかだった。

歩道から横断歩道に一步出た瞬間、信号は青に変わった。

車の群れは徐々に加速し始め、ユズキの行く手を阻んだ。

ユズキは横断歩道を完走することはできなかった。

真ん中、高速道路の柱のためにできたスペースを使った安全地帯で立ち止まった。瞬間不安に襲われ、裏を振り向く。

忍者はちようど短刀を再び背中の鞘に納めこちらを振り返ったところだった。

「くるか…?」

もちろん、と言わんばかりにこちらに突進してきた。

横から迫っていた車が悲鳴のようなブレーキを上げた。
構う素振りを見せぬまま忍者は駆ける。

「お構いなしかよ……」

ユズキは身を翻した。

どこへ逃げる？もう人気のある駅前へは車の壁に阻まれて出来ない。

裏からは忍者。横しかない。

安全地帯から抜け出し、道路の真ん中を北の方へ。

道の端は思ったより狭く下手したら30cmもないかもしれない。

頼むから右寄って走ってくるなよ、と裏から向かってくる車に願いながらなるべく端を走る。

(ちようど次の柱にはしごがある……)

点検用か何かかユズキには分かっていなかったがたまたま知っていた。

、高速道路の柱に設けられた柱を。

少しサイドミラーに接触したくらいで無事に柱まで走りぬいた。

(ここまでくれば上に登って……)

そこまで考えたところでユズキは硬直した。

それは当たり前のことだった。

はしごが施錠されていて、自由に上り下りできないこと。
慌ててあたりを見回す。

歩道に出るタイミングはあるか？
待っている間に追いつかれる。

(車にしがみついて逃げるか…映画みたいに)

◇

もはや運命すら感じた。

ダンプタイプ的大型トラックが、柱の向こう側の車線の第二通行帯を走行していたのである。

一番手前の車線、第三通行帯には次の車まで距離がある。

しかも、トラックは進路変更したばかりで低速になっていた。
今しかない。

ユズキは柱にかかったはしごの柵に手をかけ、道路と道路の間に植えてある植物の上を飛んだ。

三歩程度のステップでトラックのサイドガードと呼ばれる前輪と後輪の間に設けられた鉄柵に足をかけた。

忍者が遅れて柱まで追ってきた。

(さすがにここまでは来れないだろう…)

トラックの荷台にゆっくりよじ登りながら忍者の様子を伺う。

さて、どうする？

忍者は一瞬間をあけてこちらに走り出した。

トラックは加速し始めているが、忍者の方がその瞬間のスピードでは勝っていた。

忍者がトラックの裏あおりに手をかける。

リアバンパーに足をかけ、荷台に上がってくる。

荷台の前の方にいたユズキは焦っていた。

もちろん追いつかれることも、トラックに上る前から攻撃されるかもしれないということとはわかっていた。

何かせめて対抗できるものは？

足元にある金属製の棒をしゃがんで手に取る。

それはトラックが荷物を濡らさないためにシートをかける際、ビニールハウスのよう

にシートを張るための骨組の一本のだった。

両手で持ち、構える。

忍者は荷台に登り終わりこちらの様子を察して先ほどの短刀を抜いた。

ユズキは中学生の頃にやったきりの剣道をうろ覚えで真似て相手の体に真っ直ぐ鉄棒を構える。

忍者は両腕を肩の高さまで上げ、ユズキの鉄棒と垂直になるように真横に刃先を構えた。

両者じりじりと足を引きずりながら微妙に距離を縮めていく。

トラックは止まらない。

ユズキと忍者が初対面した交差点は信号に阻まれることなく直進していった。

トラックは大型だが荷台は8mもないだろうか。

忍者の短刀が一步踏み出すだけでユズキに接触しそうになった距離に達した。

先に動き出したのは忍者の方だった。

真横に構えていた刃を振り上げると同時に兜割のように真っ直ぐにし、ユズキに向

かって振り落す。

ユズキは鉄の棒を少し角度をつけ短刀を受け止める。

忍者の腕力は圧倒的な差ではなかったが運動をしないユズキに比べればわかりやす

いものだった。

「うう〜…」

ユズキが低いうなりを上げる。忍者に力負けし、短刀を受けつつ後退しているのだ。

荷台の一番運転部に近い部分鳥居部まで後退した。

背中が当たっている。もう後退はできない。

ぶつかつた衝撃、反発する力を利用して抵抗する。

忍者は短刀に加える力を緩め軌道を変える。

忍者とユズキの場所が入れ替わる。

両者、再び構え合う。

◇

「ふんっ」

ユズキはバットを振るように鉄の棒を忍者に向けて横に振つた。

(フルスイングならー)

狙いは当たり、ほぼ短刀の根本に当たり忍者は短刀を右手からこぼした。弾いたのだ。

勢いよく弾かれた短刀はトラックの隣、第一通行帯を走行していたワゴンの後部サイドガラスを突き破り、誰も座っていないシートへ突き刺さった。

瞬間ワゴンから悲鳴が聞こえ、急ブレーキをかけた。ワゴンは遠ざかつて行ったがトラックは依然としてスピードを保っていた。

もう一度！と言わんばかりにユズキは鉄の棒を振り上げ、忍者の方へ落した。

忍者はとつきに左の肩から突起している刀に手をかけたが間に合わず右肩、首に近い位置で鉄の棒の打撃を受け止めた。

人間なら鎖骨は確実に粉碎骨折しているだろう。相手が人間ならば。

「おうっ…」

ユズキは思わず声を漏らした。

右肩を破壊したはずの忍者が、右腕で強烈なパンチをユズキのみぞおちに食らわせたのだ。

ユズキは鉄の棒を持っていられず、その場に落とした。

カラン、と金属音がトラックの荷台で響いた。

激痛に耐えるため両腕を体に巻き付けて抑える。

「いつてえ…」

ごほごほと咳き込みながら言葉が漏れ出す。

うまく呼吸ができない。

忍者の方も右肩を抑えこちらの様子を伺っているようだった。

トラックは変わらぬスピードで街中を真っ直ぐに進んでいた。運転手はまるで荷台で起こっていることを知らないようだった。

先手をユズキが打つ。右腕を握り忍者の顔面めがけて突き出した。

忍者は左手を外側に振り、手の甲でユズキの拳を逸らせた。続けてユズキの左拳を。

一方的な暴力ではない。攻防が続く。勢いは変わらないまま、まるでひたすら刀を交え続ける構図になっていた。

拳がくれば逸らし、防ぐ。その隙を見て相手に自分の拳を突き出す。

(どこかに隙はないのか?)

連続で攻撃をし、防御もしているので隙はない。

むしろ徐々にダメージを受けている。突き指や打撲をこの瞬間ユズキは何度もそれと似た痛みを味わっていた。

実際三割程度防御は失敗していた。添わせる腕の読みを間違えれば顔や胴体に拳は直撃するし、掌を開いた状態で行う防御は突き指を何度もした。

忍者にダメージを与えられている手ごたえはない。

このままではユズキが倒れてしまう。

(このままでは……!)

瞬間トラックの荷台が大きく揺れた。

進路変更、第三通行帯に移動したトラックが大きな交差点を右折したのだ。

ユズキと忍者はバランスを崩した。それは電車の初期加速の際、予期せぬ衝撃に乗客

が倒れぬようにバランスと保つために一歩、体が傾いた方へ足を反射的に出すのと似ていた。

ユズキは慌ててバランスをとる。その瞬間を忍者は見逃がさなかった。

忍者は左の腰からくなくないを一本抜き出し、真つ直ぐユズキの頭に向かって突き出した。

しかしくなくないは空を斬る。

上半身を精一杯逸らせた状態でくなくないを握る左手首を狙い中指を1cmほど突き出した拳を食らわせる。

見事、くなくないは腕から弾かれるように飛んでいった。



(そろそろきつついな…)

ユズキと忍者。

突如透明になった人間と突如現れた正体不明の忍。

互いにトラックに乗った最初の状態になっていた。

忍者は短刀を二刀流で独特な構えを。

ユズキは落としていたはずの鉄の棒と忍者が零した、くない。
互いに二刀。

既にユズキ側は体力の限界だった。

(これに賭けるか……?)

トラックは南方面へ向かった後、すぐに西に曲がった。

道は片側3車線あった広い通路から、中央分離帯すらない道路に入って行った。

速度は減速し続けているもののまだ時速50kmは出ているだろう。

(ある意味最後の賭けかもしれないな……)

トラックは細い道を抜け、優先道路を横断し、こんなトラックが通っていいのかと疑問を浮かべるほど小さいトンネルに直進する。

優先道路横断、トラックがトンネルに差し掛かった瞬間。

「ふっ……」

ユズキは突進する。

鉄棒、くないを逆ハの字に展開するように、振りかぶる。

忍者は数字の11になるように二本の短刀を平行にして構えた。

衝撃。罅迫(つばぜ)り合い。だがもう刀同士で受け止め、耐えるようなことはしない。

忍者の刀に衝撃を与えた。それだけで十分だ。

鉄の棒とくなくいを放す。短刀を握る両腕の手首を握る。忍者の両腕を抑えた。

ここだ、と言わんばかりに忍者の左腰を下から思いつき蹴りを入れた。

忍者の小物入れからガシャン、と音がしさまざまなツールが落ちる。

まず三本刺さっていてユズキがさつき奪い残り二本になっていたくないが飛び出した。

スパイク。熊手。カギ縄。

もうコスプレだとしても本業でしょ、と悪ふざけで任命したところだ。

「もういつちよー！」

同じ箇所を蹴る。

ようやくお目当てのものが出てきた。

ソフトボール程度のサイズで和紙でできた球が飛び出した。

煙玉だ。まもなくして煙玉は爆発した。

英語ではスモークボムと訳される。花火の煙玉のように勢いよく煙が噴出し煙が充満するのではなく、一瞬にしてあたりに煙が散布される。

ユズキは瞬間的に忍者の手を放し、トラックの荷台を飛び出した。

煙に驚いたのか、トラックは急停止する。忍者は慣性に負けトラックの荷台の前の方

に飛ばされていった。

ユズキは煙から脱出していた。トンネルは真ん中あたりに階段がある。

トンネルは電車の線路の下にあり、その中心あたりに点検用かわからないがスペースがあるのを知っていた。

もちろん先ほどのはその失態はない。

フェンスはどこぞの不良がこじ開けたのかフェンスに穴が開いていた。

隙間をくぐる。階段を駆け上がる。

◇

ひたすら線路沿いを走る。

脇腹が痛む。両腕も可視できる状態ならアザだらけだろう。

敷石がザクザクと音を立てる。

「はあ…はあ」

脇腹を抑えながら必死に北側へ走る。

この町で一番大きな駅へ。その距離およそ400m。

裏から明かりが近づいてくる。

「運がいいんだか悪いんだか…」

背後から電車が迫っていた。

緋色のボディでトレードマークとなりそうなラインが特にない特徴の少ない地元の私営電車だ。

当然停車駅まで距離がないので減速している。

通過列車でその勢いに驚き一步下がった体験をした人も多いだろう。

そんな電車が少し走れば追いつく程度に減速していた。

最後の車両が通り過ぎようとしている。最初は足がかけられそうな車両下部のボックスを探していたが裏の方に絶好のしながみつきポイントをユズキは見つけた。

車両の隅にある車掌専用室のドアの下に足をかけるはしごが一段だけぶら下がっていたのである。

手はドアのノズルにかけ、電車に掴まる。

忍者は追つてこない。いや、追ってくる様子はないという表現の方が正しいか。まだ追ってきているかもしれないが暗闇に阻まれて見えない。

どうする？

交番に向いて保護してもらおうか？

服を見えるようにすればもしかするかもしれない。

隠れるか？

忍者は夜になった途端現れたのだから朝になれば消えるか？

そもそもあの生氣すら感じられない忍者は何が目的で俺を襲う？

忍者は倒せるのか？死ぬのか？捕まえて雇い主を聞き出すか？

たたん、たたんと音を出すペースを落とす電車のドアに掴まりながら、透明な人は考
えていた。

「おっと、降りないと」

駅に着く手前、ユズキは慌ててしがみついていた電車から飛び降りた。

このまま停車するまで待っていたらホームと電車にサンドされてしまう。

誰にも見つからぬまま死ぬ。ある意味本望かもしれないが今はそれどころではない。

「ん？」

駅の向こう、自分が走ってきた暗闇からザクザクと音が近づいてきた。

忍者だ。

「もう来たか……！」

ユズキは慌ててホームへよじ登り鉄柵を飛び越えた。

ユズキが走り去った瞬間、停車した電車のドアが開き乗客が溢れだしプラットホーム
をいっぱいにした。

ユズキは息切れながら、エスカレータを駆け上がった。



「きやつ」

「痛い」

「おい何処見てんだッ」

「忍者だ！」

「コスプレか？」

短い悲鳴や怒号がプラットホームに響き、消えていく。

これでもかと言わんばかりの人混みを忍者はお構いなしに突っ込んでいった。

体当たりの連続。

座り込む女性もいる。

「まじかよ……」

ふと下の階の騒動に振り返ったユズキが呟いた。

忍者が階段を駆け上がった瞬間前を向いてユズキは駆けだした。

忍者が通行人を押し倒し、かき分けて階段を駆け上がる。

階段を上がり終え、周囲を見回している忍者の裏からユズキが渾身のタックルを食ら

わせる。

忍者は階段横の壁へ激突した。

ユズキは再びターンして改札の方へ逃げていった。

「ううっ!？」

改札を飛び越えようとした瞬間、足に激痛が走る。

右足首靴と長ズボンの微かな間。

忍者の投げた短刀の一本がユズキの靴下を貫通して右足首に浅くかすった。

改札の扉に足が引つ掛かり、ユズキは頭から転げ落ちた。

ピンポンという警告音が改札本体から響いている。

冗談じゃない。コントじゃないんだぞ、と心の底で叫びつつ立ち上がり走り出した。

「なんだあれ服が歩いてるぞ」

「首なしみたい」

「何かの撮影かな」

ふと、ユズキの耳にそんな言葉が飛び込んできた。

「まさか…!？」

悪い予感が当たる。

ユズキは白いパーカー、黒いジャージ（下）が可視できる状態になっていることを確

認した。

「しまった」

服を可視できる状態にすれば警察に保護してもらえないかもしれない、先ほど考えていたことだ。

服の可視のコントロールは意志、思考で出現させたり透過状態に出来るのだから当然気を抜けば透明人間はさらし者だ。

慌てて姿を隠す。

「あ、消えた」と裏からちらりと聞こえたのでおおよそ成功しているだろう。

ユズキは透過状態のまま人混みを避けながら通りを走って行った。

◇

忍者はゆつくりと激突した壁に腕を当て立ち上がった。

周囲の人々は不思議がりつつも見て見ぬふりして通り過ぎていく。

忍者は改札の方へ向かって歩き出した。

徐々に加速する。改札直前。

忍者は高跳びでもするかのように背中を地に向け飛び出した。

改札の扉ではなく改札本体丸ごと飛び越える高さはあった。

不良の座り込みのような体制で着地した忍者は裏から「ちよつと君待ちなさい」と駅員が叫んでいたがお構いなしに走り去った。

もうすでに改札の前の通りにユズキの姿はない。

しかし忍者は匂いを嗅ぎ分け犯人を見つけ出す警察犬のように、導かれるかのように前へ進んでいった。

忍者は少し人混みを離れた通りで止まった。

そこは通りから少し離れているうえに少し陰に当たる場所にあるためあまり利用率のよくないトイレだった。

忍者はなんのためらいもなくゆつくりと入って行った。

トイレ内はさほど広くない。

忍者は入室してすぐ手前にある手洗い場前でびたりと止まった。

まるでここにユズキがいるはずだ、と言わんばかりに。

残念ながらユズキの姿は忍者の視界内で捉えることはできなかった。

気配はあるのになぜいない？とでも考えたのか忍者はゆつくりと顔を上げた。

瞬間忍者の視界は暗闇に変わった。

「おらッ」

天井はさほど高くはないがユズキが大きなバケツをもって忍者へ飛び出した。

掃除道具置場から拝借した青い小さなバケツ。

ユズキのさほど重くない体重が、落下によるエネルギーをまといながら忍者の首へ襲

い掛かる。

忍者は手洗い場の前に向かって前かがみになって倒れた。

ユズキは忍者に馬乗りになり忍者の両腕を塞いだ。

そして忍者の首に腕を絡ませる。

昔見たドラマで、警察が被疑者の首を絞め気絶させるといふシーンの猿真似だ。

忍者は吊り上げられた魚のように飛び上がる。

わずかに稼働する手首を使い腰の道具入れからまきびしを投げつけたりして抵抗している。

ユズキは背中に刺さるまきびしの痛みを耐えながら首を絞め続けた。

煙玉が爆散する。忍者も必死だ。

忍者は体を震わせながら、徐々に弱っていった。

びたり、忍者の動きが止まった。

首の抵抗する力も一切なくなった。

「気絶したか……？」

それとも、死んだか。

絡めていた腕をユズキはゆっくりほどいた。

忍者は動かなかった。

ユズキが立ち上がった瞬間、じりりと警報が鳴った。

報知器が煙に反応したらしい。

「まずいな…」

煙だらけで立ち上がると忍者の姿はほぼ見えない。ユズキはそそくさとトイレから出ていった。

◇

駅前には騒がしい空気に包まれた。

サイレンが響く。警察に消防車が風のように流れていった。

駅前の詳しい様子はわからない。

ユズキは駅から200m東に行ったところにある中学校の校庭にある遊具に腰を下ろしていた。

見通しの良い滑り台の頂上付近。

足を怪我していたのでゆっくり歩いてきたが忍者は追ってこなかった。

「なんなんだ…一体…」

初めて透明人になった夜、謎の忍者に襲われる。

なんだそれは。

メジャーっぽいが聞いたことないぞ、そんな物語。

しつかしよく生き凌いだな。

自画自賛。行き当たりばったりな作戦ばかりだったが。

続いて追手が来ることがあるのだろうか？

忍者以上に手ごわい奴が来るかもしれない。

結局警察に届けることもしなかった。

それは今の自分の特殊な状態を説明できないこともあるが、本能的に隠そうとしてしまったのかもしれない。

今はそれでいい…。

もしかしたらそれは誤った判断かもしれないが。

これから先、どうなるのだろうか？

謎の追手と戦う孤独なヒーロー。

他人事で客観的に見るならかつこいい限りだろう。

でも今日みたいなのを続けるのは無理だ。お手上げだ。

先ほどのことを思い出すだけでも心臓が痛くなる。

ユズキが再び思考の無限回廊にはまりかけた途端、背後から聞こえた声に引きずり出

された。

「おい……ここぞ何してる!!」

ライトをこちらに照らしながら男が叫んでいる。年季の入った声だ。

「やべっ」

またやつちまった。

とつさに透過状態になった。

中学校の用務員はライトを周囲に照らしながら「やろう、どこ行った」と呟いて周囲を見回している。

見つかる心配はほぼ無くなったが、見つかると面倒なので帰宅することにした。

自宅まではまだそれなりに距離がある。

痛む足を引きずりながらゆっくりと歩いていく。

突如駅に現れた透明人間は夜の駅前に消えていった。

◇

インターミッション

「心臓病の一種です」

病室の一室で、眼鏡をかけた小太りで白衣の男が二人の親子に向かつて言った。

「親子は両方とも女だった。母親の方は驚きつつも続けてください、と医師に更なる説明を求めた。

「生まれた時から休むことなく動いている心臓が、病気によつて働きが悪くなっているのです」

巻き毛にロングヘアの母親は両手を口に当て医師の話聞いていた。

シヨートカットの娘は俯いたまま微動だにしなかつた。

「病が進み働きが悪くなり続けると、十分に血液を送り出せなくなります。心不全になるのです」

ええ、という母親の動揺の一言を無視して医師はこう続けた。

「今回出た診断結果から考えるに、残念ながら薬による治療では心不全は改善が望まれないでしょう」

ピクリ、娘が反応しゆつくりと顔を上げた。

「近い将来、自分自身の心臓では生きていけなくなります」

うう、と母親側が泣きだした。

「先生……どうすればよいのでしょうか」

有効な治療法はあるのか？それとも残った期間をどう生きろというのか？

どちらの意味を込めて聞いたのかわからないが母親が小刻みに震えながら聞いた。

「成功率は八割ですが有効的な治療法があります」

娘は目を静かに見開いた。

光を失った赤い瞳で。

医師もその様子を見たうえで続けた。

「近年増えてきている心臓移植です」

自分の弱ってしまった心臓と相手の健康な心臓を交換すること治療法だ。

大概提供をする側となるドナーは死亡している場合が多い。

提供する部位以外の箇所の病で倒れ、死亡した者。自殺者。

臓器提供意思表示をした者が死亡した際にその部位を取り除き、まだ命あるその臓器を必要としている者に渡される。

有効な治療法がないなら取り替えてしまおうという横着にすら聞こえる治療だった。

「すぐに見つかるものなんですか…?」

母親が言っているのはおそらくドナーのことだろう。

娘の意見はお構いなしに話を進める。

「もちろん少々お時間がかかります。最短でも一週間は欲しいところですが」

「お願いします…娘を救ってくださいい…」

まるでドラマのワンシーンみたいなことを母親がやっている。

医師はその姿はようやく見慣れてきたモノだったがやはり慣れないな、といった顔をした。

それはごくごく当然の姿で親のあるべき姿だった。

「…」

娘は黙って俯いたままだった。

医師はその姿に少し気にかけたが医者としての返事は一つだった。

「尽力します」

20↓30

3.

「!？」

目覚めると部屋いっぱい昨夜の忍者があふれていた。

こんなにすし詰めになってるのに刃物なんて出したら仲間刺すよきつと。

体へばり付いた忍者、ユズキの首の前に短刀を突き出す忍者。

忍者は全員こちらを向いている。

「あー……あはは」

笑うしかないな。

わざわざ起きるまで待つてなくても意識のない状態の時に殺すなり連れていくなりすればよかつたのに。

とことん暗殺に向いてないね、忍者の癖に。

「おはようございませう」

煽ってみる。どうせ勝算はない。

「みなさん大勢でわざわざどうも……うっ」

ユズキの頭付近にいた忍者の一人が両腕でユズキの首を絞めてきた。

(死ぬ！)

両腕は力を増していくばかりだ。

ユズキの腕は忍者が上に乗っかっているため抵抗すらできない。

(目には目を……てか)

体を必死にひねらせて抵抗するがどうにもならない。

徐々に意識が遠のいていった。

「はっ」

布団から飛び上がった。

何も変わらぬ部屋の中。

当然忍者の姿はない。

「夢かいッ」

突っ込みは空しくも壁に吸い込まれていった。

「結局現象はまだ終わってないっほいな……」

体の完全透過現象。

自分に触れているモノは思い通りに出現操作ができる謎オプシヨン付き。

一応正夢だと困るので施錠を確認したのち家中を見て回ったが特に変化はなかった。突如自分の目の前に現れた忍者。

いろいろ昨日は起こり過ぎて頭の整理ができていない。

整理がつかないまま就寝したせいか、もう午後を回っていた。

「もう昼すぎでんじやないか……」

この日出勤の予定はなかったもののどう考えても寝すぎた。

幸い、昨日怪我した足首は完治とはいかないがかさぶたができ、痛みも引いていた。

「めんどくさいけど……結局状況変わらないし……」

スマートフォンを手にし、電話を掛ける。

「インフルエンザあ？」

店長の怒気に燃える声が、スマホのスピーカーから響いた。



ユズキは店長との長く辛い苦しい電話を終えたのち、布団から出るとふと思いついたかのように勉強机へ向かっていた。

一番下の大きな引き出しを開く。

「あの忍者……」

まさか。不確かだから確認する。

引き出しの奥の本の一つに手をかける。

それは幼稚園の頃の卒業アルバムだった。

「記憶が確かなら……」

かわいい動物の絵が描かれた表紙の卒業アルバムを開く。

かつて一緒に遊んだであろうか、園児たちの顔写真が並ぶ。

その項が過ぎると、次に幼い文字が並んだページに移った。

文集か。まだ漢字すらまともに習っていない幼稚園児に。

ユズキは気になっていたページを開いた。

「やっぱりか……」

悟るかのようにため息をついた。

そこはかつて自分が書いたページ。

5歳の頃だろうか。

綴られていた。

自分がブロック遊びが好きなこと。

そして忍者になってみたいことも。

要約するとその二つのことだけ。

(悪趣味な野郎だな……無垢な幼稚園児の夢の姿で向かってくるとは)

絵日記のような粹取りになっており上にはイラストが添えられていた。

紺色の忍者。

幼稚園の遊具の一つである、半分埋まったタイヤ。ブランコ。

周りには六本の刀がなぜか散らばっていた。

あの、昨夜現れた忍者も6本の刀を持っていた。

この騒動の犯人は同じ園児か、その関係者か？

部屋に誰かが入った形跡は先ほどチェックしたから大丈夫なはずだ。

あるいは以前から侵入し物色されていたか。

忍者は何も語らなかった。

自分は俺の懼である、そういっただけ。

ヒントが少なすぎる。

おそれ。忍者になりたいです、という幼稚園児が夢見ることが懼れ？

恥ずかしむべきことだと？

5歳だぞ、許してやれよ……、心底思う。

もつところ……中学生の頃に書いたポエムとか、高校生が彼女に送ったメールとか。

物心ついた後の方が人の心はつかみやすいと思うが。

「あの、すいません」

「!？」とつきに周囲を見回す。若い女の声。

俺に言っているのか、という問いに答える。

「少し話があるので、とは言っても昨日のようなことになってしまいかもしれませんが……。」

職場裏の神社まで来ていただけですか……？」



「またせたな」

「いえ」

そこは職場のすぐ西南に位置する尼川神社だった。周囲をアパートやマンションで囲まれていて敷地も狭いが建物は紅色に染められ存在感は十分にある神社だ。

誰が管理してるかは未だに知らないが。

先ほど起こった出来事、自室での会話。

ユズキはその誘いに「少し待ってくれないか」と答えた。

ユズキに語る声の主は承諾し、部屋は再びいつもと変わらぬ静かな部屋に戻った。

「あんたが……俺の部屋で響いた声の主か？」

そうです、と女は答えた。

灰色っぽい髪を裏で一つに纏めた髪。巫女のような着物。腰に巻き付けた大縄。ブーツからは天狗下駄のように板が縦に足裏から突き出している。紺色の忍者とは違い女は紅白で衣装の色がまとめられていた。

そして特徴的なウサギの仮面と薙刀。

「なぜそのような姿で……？」

「まあ、存在証明っていうか。趣味だと思つて気にしないでくれ」

ユズキは全身黒のジャージに黒いニット帽、水色のアクリル板でできた仮面をかぶっていた。

誰が見ても通報レベルで全身が隠されていた。

ユズキが見えない全身を何とかカバーしようとした結果である。

「顔は見せてくれないのか？」

「見たら後悔しますよ」

「なぜ？」

あれか、期待するほど可愛くないですよっていう謙遜か。それとも不快な気分になる

ほどの容姿だと言うことか。

「いずれ私の容姿は確認できるでしょう。今はもつと他に質問したいことがあるんじゃないですか？」

質問したいこと。もちろん死ぬほどある。まずはざつくりと質問をまとめる。

「俺と周りに何が起こってる？」

この現象。謎の忍者。昨日のことを知ってるような口振りだ、答えられるだろう。

「貴方が透明になっていること。それは貴方の体が一時的に奪われているからです」

「何故？」

「それは貴方しかわかりません」

何を言っている？原因が俺にあるとでも言うのか？

「何故忍者は俺を襲った？」

「貴方と向き合うためです」

「あんな暴力的なことしかできないのか？」

「他の手段がわからないからそうなってしまふのでしよう」

「忍者はこれからも来るのか？」

「来ません。代わりはいませんから」

「あんたは何の為に俺に接触してきた？」

「同情、と言うべきでしょうか……哀れんでいるのです」

ウサギの仮面の巫女は少し頭を下げて言った。

「私は、あなたの“哀”ですから」



「!？」

今の目の前のウサギの仮面の巫女は確かにあなたの哀（かなしみ）と言った。

忍者はたしかお前の懼（おそれ）と言った。

ユズキはその場でウサギの仮面の巫女に向けて構えた。

「昨日の忍者は俺の懼れだと言っていた、何か関係があるのか!？」

「あまり多くは語れません……。貴方が心を閉ざしてしまうから」

巫女は右手に持っていた薙刀をユズキの方に向けた。

「何の話だ!？」

「貴方自身の話です」

本殿と鳥居のちょうど中間。

「じゃあ……あんたも昨日の忍者みたく俺を斬りにかかるのか」

不思議なアレンジのかかった巫女の格好をした女と不審者のような恰好をした透明人間。

「不本意ながら」

対抗してしまうのか。

ユズキは構えつつじつと巫女を見つめた。

「これを」

巫女は背中に手をやりぶら下げていた刀を前に、ユズキに向かって突き出した。

突き出した腕をそのままにして巫女は腰を下ろした。

ゆっくりと突き出した腕を地面の敷石に着け刀を置いた。

柄や鍔、鞘が真っ黒な刀。打刀。

「お使いください」

「なぜ」

「何故でしょうか……貴方から特別な感情を感じるのです……」

「はあ？」

「それはかつて貴方が彼女に寄せていたキモチです」

「何の話だ！彼女とは誰だ!?!」

「私を斬ればわかります」

ふざけているのか。

最初のうちは気にならなかったがやっぱり話が噛み合っていない気がする。何かにセーブされていて、全て口を割れないようになっていているみたいだ。

それとも俺をからかっているのだろうか。

巫女は地面に刀を置いて後ろに下がった。

まだ何もしませんのでお取りください、という誘いに乗りユズキは刀をとった。柄と鞘を両手で持ち引き抜く。

二尺四寸、おおよそ72cm程度長さはあるだろうか。

2mを超える薙刀を相手は持つてるのに、心許ない武器だ。

ないよりはマシだろうが。

ユズキは3、4回素振りをして真っ直ぐに刃先を巫女へ向けた。

巫女は準備できましたね、と言わんばかりに膝を少し曲げて構え言った。

「参ります」

◇

巫女の履いている天狗下駄のような靴がカタン、と乾いた音を響かせた。

(速い！)

巫女の初動、駆けだす一步目が爆発的な勢いを纏っていた。

ユズキに向かつて一直線に突進してくる。

薙刀を直線から縦に、振りかぶってきた。

ユズキは刀を両手でバットを振るようなフォームで薙刀を受け止める。

刃同士がクロスし、鈍く金属音が響く。

だが、長身とは言え女性。

かつ足元に力を入れづらい底面積の少ない天狗下駄を履いているのだ。

ユズキに力負けし薙刀の刃先を飛ばす。

吹き飛ぶ薙刀はゆっくりと減速し、巫女の周りをくるくると回転した。

2 mはあろう薙刀をバトントワリングのように体の周りを華麗に、縦横無尽に振り回している。

「あんたらは誰かに命令されてやってるのか!？」

ユズキは縦に巫女に斬りかかる。

「私たちは誰の指図も受けていません」

高速回転する薙刀に刀は弾かれた。

「じゃああんたらは何なんだ」

弾かれユズキの斜め裏に飛んだ刀と自分の体をスピンさせ巫女にスイングするように斬りかかる。

「私は貴方自身であり、貴方の一部だったモノです」

またも高速回転する薙刀に攻撃は阻まれた。

しかも、回転させるために手を薙刀から放している瞬間を狙ったのに。

「そのうちの、“哀”に当たるのが私なのです」

ぴたりと高速回転をやめ、ユズキに向かって刃を構える。

（哀しみとは何だ？）

感情の一つ。

（もしかして哀しみを感じることもできなくなっているのか？）

なにか思い出そう。悲しい出来事を。

誰にだってできることだ。

大切な人を亡くしたり、モノを亡くしたり、失敗したり。

（なんだ……？）

目が潤むような悲しいことを思い出しても、何とも思わない。

（どうしたっていうんだ!?)

ユズキは刀で巫女を斬りかかるフェイントをかまし、本殿のすぐ隣にある小さな鳥居

の影に隠れた。

「お前、俺に何をした!？」

もしかしたら女性に向けてこんなに声を上げるのは初めてかもしれない。

鳥居の影からじやなければそれなりに勢いがあっただろうが。

「何もしてません。貴方が変わったのです」

俺が何をしたっていうんだ!？」

意味が分からない。右から巫女が追って来れば鳥居の左に逃げる。

まるで鬼ごっこだ。まるで戦闘になっていない。

◇

巫女は鬼ごっこに終止符を打つように鳥居の足を斬り崩した。

ユズキは巫女の方に体を向けたまますぐに後ろ、先ほど二人で話していた敷石の順路にステップした。

腐敗した木製の鳥居は砕け砂埃を立てる。その煙から飛び出し、直上から巫女がユズキに迫る。

仮面の下部から見える口は固く閉まったままだ。にこりもしない。

空中で前転し縦に薙刀を構え、一直線にユズキに振り下ろした。ユズキは刀を横にし身構えた。

直後落下してきた巫女の薙刀とユズキの刀がクロスする。衝撃。

「うっ……」

全身を襲う想像を超えるショック。骨が軋み、筋肉がこわばる。思わず声が出た。

「ぐっ！」

瞬間、力任せに空中に留まっている巫女を吹き飛ばした。

着地に失敗することを期待していたが薙刀を地面に差し空中で後転をかまして着地した。

（余裕かい……）

ならば、とユズキは刀を左手に回しポケットに手を突っ込んだ。

びたり、巫女がその様子を見て身構えた。

（忍者から拝借した秘密兵器……）

ユズキは腕を突き出した。

瞬間に地面を蹴る。

巫女に向けて突進する。両手で握る刀で斬りかかる。

薙刀を再び回転させる巫女。速さは徐々に上がっていく。

刀と薙刀が音を立て交差する。

衝撃を受け互いの刃先は離れた。

先に動き出したのは薙刀で、すばやくユズキの顔面めがけて襲い掛かる。

ユズキは両手で握っていた刀を右手に持ち替えていた。素早く左手を刀を握る右手の付け根にかけた。

薙刀は空を斬り裂いた。

そこにいたはずのユズキはいなかった。

「いつてえー！」

ユズキは巫女の真裏、神社入口から見てすぐ左の大木の付近で宙に浮いていた。

「ワイヤーですか」

「厳密に言えばカギ縄だ」

忍者の持っていた道具。大木の枝に引つ掛かり、その下にユズキがぶら下がっていた。

「いつて」

途端にユズキは地面に落下した。ワイヤーを巻き戻したためだ。

「今初めて使った。意外と痛いね」

「そんな玩具じゃ私には勝てないですよ」

わかっている。

相手は哀しみ。

自分が最も普段痛感している感情だから。

◇

こいつは期待以上の代物だ。

なぜ昨夜使ってこなかったのかと疑問に思うレベルだ。

忍者のカギ縄。

縄でできてはいない。金属製の繊維でできた黒い縄。

一見0型のフックにしか見えないカギの部分。

巫女は返事をしないユズキに対し薙刀を振りかかった。

ユズキは再び腕を振り、高速で滑空した。

巫女の背後ずっと奥の神社本殿の屋根にぎこちないものの着地した。

「飛び道具はないんだろう?」

「ありません」

ユズキのあおりに態度を変えないウサギの仮面の巫女は答える。

名前の如く、その仮面に隠された表情はどこか寂しそうな雰囲気を感じさせる。

本当に目の前の女性是自己だったものなのか？

俺は性格も体も男だ。

一度くらいは女の性に憧れたこともある。それだけで？

目の前の女が、自分の理想像とでもいうのか？

さすがに高身長すぎやしないか。もともと背が高い方ではない俺は彼女に背が高い方がいいなんて思ったことはない。

そして、ウサギの仮面に薙刀、巫女服。これも忍者同様に何かその格好である理由がありそうだ。

巫女が地面を蹴りこちらに飛び込んでくる。

再びユズキはワイヤーを使い神社入口から見てすぐ右の大木に飛び出した。

巫女も本殿の屋根を踏み台にし、Uターンする。

(哀しい…悲しく思えないことが)

いち早く大木まで飛んだユズキは即座にワイヤーを木から外し、振り返った。

一歩遅れてこちらに飛び込んでくる巫女。

ユズキは振りかかる薙刀を後ろの太木で防いだ。カン、と薙刀の刃先が幹に食い込む。

瞬間ユズキはワイヤーを本殿へ向けて飛ばした。両手ではなく右手で、右手首のあたりを触る。

ユズキは間に巫女がいることを構いなしに神社本殿へ向けて飛び出した。

「！」

左手で刀を握りつつ左腕を翼のように広げて巫女を抱える。

巫女は薙刀を放し、ユズキに捕まった。

まるで鷲に捕まる兔のように。

高速で滑空する二人は閉めきられた扉をぶち破った。

網状に組まれた木材が砕け、硝子が割れ散る。

二人は室内奥に身を寄せ合いながらごろごろと転がって行った。

畳に扉の破片が刺さる前に。

室内中央には小さな階段があり二人はそこでようやく止まった。

衝撃とともにギシリと木材の軋む音と、扉の残骸が地面に叩き付けられる音が室内に響いた。

両者激突による衝撃でピクリとも動かなくなった。



「！」

先に目を覚ましたのはユズキだった。

ユズキは巫女を押し倒したような形になっており自分が巫女の上に覆いかぶさる形で倒れていた。

ユズキはうつ伏せに。巫女はユズキに向かい合うように。

巫女はぐったりとして動かない。

仮面の下から覗かせる口は半開きのままだ。

露出した肩から二の腕中央あたりまでの肌と、スカートから下に伸びた腿部の肌。密着した体から巫女の体温が伝わる。

忍者の時とはまるで違う。仕掛けできた普通の女の子なのではないかと思うくらいの生氣。

女の子押し倒すなんて人生で初めてだな。下敷きになっている。

少し、この時間が惜しく感じられたがユズキは膝をつき体を浮かせた。

直後半開きだった巫女の口が閉じられた。巫女の体が動き出す。

じたばたと暴れる巫女と、動きを止めにかかるユズキ。

「何をっ……」

ユズキは返事をしなかった。

客観的に見たら犯罪だろうな……と他人事のように考えながらユズキは巫女を羽交い絞めにする。

「くっ……ふっ……」

抵抗する巫女の声が漏れる。両者とも必死だ。

巫女は抵抗する力を弱めていった。息を上げて抵抗していた両腕を下ろした。

沈黙。

ユズキは巫女の動きを四肢を使って固定しながら声をかけた。

「あんたを見てるとなんか懐かしい気分になる……」

顔も見えないのに。

「どこかで会ったことがある……?」

身長が高めの女性。ポニーテール。

俺の人生の中で女自体登場することが少ない。

特徴からして忘れることなんてそうそうないはずだ。

「貴方はまだ思い出しきれないみたいですね」

巫女が震え声を漏らす。

「わからない……あなたは誰なんだ」

何処か……。数か月なんてレベルじゃない。もつと昔のような気がする。

目の前のウサギの仮面の巫女は何も語らない。

160cm後半はあるだろう長身。適度に筋肉のついた健康的な身体。駅前で歩いていたらモデルにスカウトされるかもしれないと思うほどのスタイルの良さ。

違う。目の前にいる女からかつて感じたその感情は。

「もしかして……」

ユズキは右手を仮面にかけた。

巫女は抵抗しない。

「あなたは……」

震える手で仮面をゆっくりと引っ張る。



ユズキはふわりとした感覚に襲われた。

ジェットコースターでいう落下寸前の足が浮く感覚に似ている。

「うおッ」

飛び上がったユズキは神社の天井に激突する。

仮面を剥ごうとしたが瞬間的に巫女の拘束されていなかった腕をユズキの大腿部に手刀を突き、足先反射で飛び上がり巫女の足の拘束が解かれた。

間もなくしてユズキの腹部を思いつき蹴り上げたのだ。

当然激突したのちユズキは地球の引力で落下した。

「あうっ……」

床に落下して痛みにもがくユズキを構わず、巫女は建物から出ていった。

「ツくっそ……」

転がっていた刀を拾い上げ巫女の後に続く。

巫女は大木に刺さった薙刀を引き抜いていた。

建物から出てきたユズキに振り返る。

巫女は地面を蹴った。開戦当初の爆発的なスピードの突進がユズキを襲う。

ゆずきは先ほどと同じように受け身をとった。

「うあああああああつ」

全身の悲鳴が口から勢いよく溢れ出す。

「うおあああー！」

力任せに薙刀を払い、巫女を斬りかかる。

疲弊したユズキの居合切りは当然のように薙刀に阻まれた。

続けて巫女に何度も斬りかかる。

そのたびに薙刀で阻まれた。

ユズキの隙を見て、薙刀の石突と呼ばれる薙刀の刃のついていない方の先で脇腹に突きを繰り返す。

「うぐオツ」

ユズキは勢いよく後方、本殿と小さな鳥居の間にある案内板に向かって吹っ飛んだ。

1, 2 回空中で後転し案内板にさかさまの状態で頭から激突した。

案内板のない下腹の部分が慣性に流され、腹部を軸にして案内板の裏に落下した。

ちようど足からの着地に成功したユズキは弱々しく神社の影に足をずりながら走って行った。

巫女はユズキが隠れに行った方と逆の方向に走り出した。

ユズキは左回りで神社裏に回って行ったのだから、右から回り込めば早いと判断したからだ。

神社の裏は左にはマンションや駐車場があり高い壁があり登ることが困難だ。

それなら右側の民家の柵を越えて逃げた方が早い。

「この期に及んで逃走なんて……」

巫女が一言漏らした。

素早く本殿の裏に回った。ユズキの姿はない。

あの様子では角まで達しているかも微妙なところだ。

巫女は薙刀を両手持ちに切り替え角をまがった。縦長の建物な為すぐに曲がり角に差し掛かる。

角に差し掛かり、巫女が曲がり角に足を一步出した瞬間。

ユズキが小さく振りかぶって巫女に突進してきた。

巫女は油断していて薙刀の回転による防御ができなかった。とっさに薙刀の柄の中央部分で刀を受ける。瞬間木製の薙刀の柄は綺麗に両断された。

そのまま振り下ろしていない刀をユズキは力任せに突きをするように真っ直ぐ巫女に向けて突き向けた。



「くっ……うあ……」

巫女は声を漏らしかたかたと両足を震わせた。

ユズキの刃がウサギの仮面の巫女の左胸付近を、刺し貫いた。ゆっくりと力が抜けた両手から両断された薙刀を放した。

ユズキは両手で刀を握ったままだ。

わざと追い詰めさせた。油断を誘ったのか、それとも不意を突いたのか。どちらにせよ、もう遅い。終わったことだ。

「…………お、…………お見事です…………」

かすれた声で巫女がユズキに言った。

ぼたぼたと巫女の胸のから血液が溢れ出る。咳き込む巫女。吐血。

巫女は立っていることが困難になり少しふらついた後、すぐ裏のコンクリートの壁にもたれるように倒れた。

ユズキもだいぶ疲れが溜まっているのか猫背になり右膝をガクツと落とした。

「この戦いはあんたを殺さないで終わらないのか」

ひゆう、ひゆうと息を上げる巫女はゆっくりと頷いた。

身体のあちこちが熱い。

負傷による痛み、巫女にしたことに対する罪悪感。

ユズキは巫女に更なる攻撃を加えようとしなかった。

巫女の様子からしてもう長くは持たないことを悟っていたからだ。

「どうしてこうなっちゃやうんだらうなあ……」

自分がやったのは殺人と変わらない。

忍者の時とは違う温もりを、この巫女は持っていた。

心地の良い温もり、人と抱え合ってじわりと感じられるような。

本当は人間なんじゃないか？

いまだってこうやって大量の血液を流して苦しんでいるというのに。

俺は、取り返しがつかないことをしたんじゃないか？

巫女はじつとユズキを見つめて声帯から声を絞り出す。

「目を……背け……ない……で……哀……み、から……」

巫女自身のことなのか、ユズキの感情のことを示しているのかはわからないがちゃんと伝わった。

忠告として受け取ろう。

「わかった……」

返事を聞くと、巫女の口が少し緩んだ気がした。

震えていた巫女が動かなくなった。

ユズキはふらふらと巫女に近づき、亡骸の仮面に手をかける。

「……前越さん……」

整った可憐な女性の顔。瞼は閉じられている。その両端からは涙の跡が見られる。吐血の止まらなかつた口はどこか微笑んで見られた。

前越稔。小学時代の初恋の相手。片思いで終わってしまったが。

中学時代もたまに思い出していたが、今となつては記憶の片隅に埋もれてしまつていた存在。巫女は見たら後悔するといつたがそんなことはない。こんな失恋も大切な記憶なのだから。

突如ユズキは雷に打たれたような衝撃を味わつた。

重大なミスをして、心が折れそうになる痛み。親戚や友達、知り合いを亡くした時の痛み。失望感、挫折感、喪失感。

浅いものから深いものまで、あらゆる哀しみが戻ってきた。

「うわあああああああああ!!!」